

あの頃

とうとうパンクした自転車が二台になった
何年も杜宅の地下の駐輪場の一番奥に放置されたままの 息子の白い自転車と
もう一台は通勤で使っている私の赤い自転車

急いで帰宅し 息子を近所の自転車屋誘ってみると
思春期真っ只中にしては意外にも「行くよ」の返答
春の日の平日の夕方

なまあたたかい空気の中を 先頭は私で 二人で自転車を押しながら進む

(二人してマヌケだよね) (だよねー)

(今日何してたの) (歴史理解)

心の中で 声にはしない たわいない質問と予想される答えいくつかを繰り返して
二つ目の角を曲がったところで ふと 香りに呼び止められた

これは そう きつと沈丁花

周りを見ると ほら やっぱり

「いい匂い」「本当だね」

「母さんが小さい頃三重のおばあちゃんちにあったんだ」

(あの頃はスカートをはくのが苦手だったの)

(もう一度あの頃にもどれたら)